

13	受験番号
中	

国語 その一（六枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

もう十数年も前のことであるが、ある作家といっしょに、ある外国を旅行して歩いたことがあった。ホテルで、その友人の作家と話をしているうちに、彼が目を伏せて、ぼそりと言った。「こうして毎日旅行をしてあるくと、一生懸命働いている人がバカみたいに見えるね」と。

それはたしかに極端な言い方というものである。目を伏せてでも言わなければ言えないような言い方というものでもある。とりわけて「バカみたいに」という表現を文字通りにとってはならないかもしれない。いのであるが、そこに、しかし、何程かの真実が含まれていることもまた否定しがたいのである。

どこのいかなる土地であれ、そこに定住をして材木を引つ張ったり、川や海に網をうったりしての、それぞれの生業をいとなみ、ヒンブいずれにしても生計の道をたてている人々と、その土地にさしたる、直接の用もなく、なんの責任もない旅行者とでは、せいぜいのところで、同じ人類というものに属しているというくらいのかかわりしか生じないのである。それがわるいなどと私は言っているのではない。

人はときに自分の定住の地と生業をはなれて、責任のない目で人々の生活のありさまを眺めてみることも必要なのである。すなわち、自身の定住の地においての、一生懸命に働いている、そういう自身の姿そのものが、行きずりに通りかかった旅行者には、「バカみたい」なものに見えるかもしれないことを知るだけのためにも。

私のような文学の仕事に従事している者にとって、*如上のような人間生活の在り様を翻訳してみるとすれば、それは、いわば定住者の文学と旅行者の文学ということになるであろうと思われる。たとえばその旅行者が作家であった場合、その土地のことを、どの程度にでも調べ、観察し、その上でそれをなんらかの形で書いたとしても、モデル問題などというものは生じないであろう。

けれども、定住者がその定住者同士のことを書く場合には、必ずやどの程度かにおいてモデル問題というものが生じているのである。モデルにされた人がそれを問題とすると否とを問わずに、それが実在することだけはウタがえない。

言うまでもなく、旅行者といってもそれは千差万別であつて、行き先に、たとえば商用などというビジネスの仕事のある人などは、本来的に旅行者であるかどうかと問われなければならないものでもあろう。そういう人は、行き先での定住者と責任のある応対、*接衝などをしなければならぬのであつてみれば、決してその対応者が「バカみたいに」見えたりするはずはない。

しかも、*虚構のなかを浮遊して行くかのような、いわば純粹旅行者というものがもしあるとすれば、彼は旅先で何を見、何を観察するか。旅先で接する人々が、もし同じ人類の一員というほどの関係としてしか関係して来ないとすれば、必然的に彼の見る、あるいは観察するものは、それを見聞するおのれ自身の反応というものになるであろう。

あるときに私は、ある西洋音楽の専門家と話していた。その専門家が言うには、西洋の家というものが石造のそれであるからして、音が外に洩れない。だから西洋の音楽家たちは自宅で思う存分の練習が出来

受験番号

13
中

国語 その三（六枚のうち）

世界もまた世の中であり、世間なのである。もはや「外国」といったことにあまりこだわりすぎることもないであろうと思う。私としては、自分の仕事さえ出来ればどこにいてもいい、またどこで死んでもかまわぬと思っっているようである。それに、ことばの不自由さということにも、それほどこだわらなければならないように思っている。定住とまで行かなくても、住みついてしまえばどこのことばでも、生きて行くに必要な程度には、誰にしても覚えてしまうものである。私の家内などははじめスペイン語を一つも知らずにいて、別に教師につくこともせず一年半いて、しまいには買物に行つて値切るということまでやつてしまったものである。

私自身スペインに住んでいて、町に散歩に出て、ときどきは、なぜこうもスペイン人ばかりいるのだから、と首を傾げるといっておかしなことになったこともある。

また私どもが住んでいた頃に、夕方の子供用テレビの番組に、日本製の「水滸伝」というものがあった。これが終わった頃に散歩に出ると、近所の子供たちがいつせいに「チーノ、チーノ（中国人）」とはやしたてる。それで私は「チーノではないぞ、ハポネス（日本人）だぞ」と言つて、買物籠を振りあげて追いかけてまわしたりしたものであった。

それは遊びである。けれども、一度「なぜチーノではないのだ、なぜハポネスなどであるのか？」と子供に反問されて、ぐっと閉口をしたことがあった。人々のなかに、世間に融け込んでしまえば、世界もまた世の中であり、世間であるにすぎないのである。こだわりを捨てることである。

思うにこだわりは、むしろ本国——われわれの場合には日本——から伸びて来ている見えない紐、あるいは綱によつてがんにがらめにされている場合に、どう仕様もないものとしてまつわりつくようである。ある商社員の場合、である。夏の休暇の時期に入つて、アパートのブラインドを朝から晩までおろし放しにして、昼間から「デントウ」をつけて暮している。どうしてそんなことをしているのかと訊ねると、アパートのまわりじゅうの家族がみなバカンスでどこかへ旅行に行つてしまい、ほとんどの部屋がブラインドをおろしている。けれどもこの商社員のつとめている東京の本社は、決して一週間以上の休暇をくれない。従つてブラインドをおろしてでもいなければ、恥かしくて夏のさなかに町なかにはいられないのだ、と言う。

情けないはなしではあるが、これが実情のようである。

バス（風呂）にお湯を入れたままで東京からかかつて来た電話に出て、部屋じゅうを水びたしにしてしまったりもしているのである。

しかし世界もまた世の中であり、世間であるにすぎぬと覚悟出来るためには、一つの*必須の要件があると思われ。

それは、自国の歴史を徹底的によく知ること、また相手国の歴史をも、ひよつとしてその当の国の並みの人々よりもより一層に深く広く知ること、である。そのための手だてには事力かぬはずである。

しかもその上で、何をどう見るかという視点の問題もあるかもしれない、と付け加えておきたい。文化、文明に生粋なものなどはありえないのである。文化、文明は、すべて異質なものとの衝突、挑戦、敗北、占領、同化、異化、克服の歴史なのである。たとえば、奈良へ行ってそこに何を見るか。そこに純粹

13	受験番号
中	

国語 その四（六枚のうち）

な日本を見る人は、逆立ちをした旅行者のようなものである。むしろそこに、印度、ペルシア、中国、朝鮮の文化、文明の波が押し寄せて来て、その波の遺して行ったものを見る人の方が健康な目をもっていると言えるはずである。

そういうところからはじめての歴史についての知が肉眼の裏打ちとなってくれたら、異和感のあるものについての、その異和の根元にあるところのものについて納得が行くはずである。

たとえばイスラム教のチイキへ行つて、飛行場で、あるいは銀行でさえも、一日五回、デスクのそばにいつも置いてある敷き物をしして祈りと礼拝をはじめられれば、大抵の同胞はみな呆れてしまうはずである。呆れていられるあいだは、まだいいのである。それが、何かにつけて気にかかり、この野郎、何をしているか！ などと思ひ出すならば、世界は世の中にも世間にもなつてはくれない。それはいつまでも「外国」であり、「世界」であつてしまうのである。

そういう人に限つて、帰りの日本航空の飛行機に乗り込むと、途端に大酒を飲み出して大声張りあげての自慢ばなしなどをおつぱじめしてしまうのである。それは*空疎なことであつて、何の蓄積をもその人にもたらさないであろう。一回その自慢ばなしをしまえば、それでその経験は一過性のものとして空に散つてしまふであろう。

それでは、世界は世の中にも世間にもならず、それは人生にすらなつてくれないのである。「一生懸命に働いている人がバカみたいに見える」というところから発して、人々が行きつけるところには、無限に豊かなものが存在するであろうことだけは間違いない。

（堀田善衛の文による）

（注）*如上……………前に述べたとおり。

*接衝……………有利に事を運ぶように相手とかけひきをすること。

*虚構……………つくりごと。

*デモンストレーション……………注目を集めるために実演すること。

*嚙喰……………楽器の音などが澄んでよく聞こえるさま。

*堂宇……………堂の建物。

*上乘……………最もすぐれていること。

*水滸伝……………中国・明代の長編小説。

*必須……………なくてはならないこと。

*同胞……………同じ国民。ここでは日本人。

*空疎……………形だけで内容がとぼしいこと。

13	受験番号
中	

国 語 その五（六枚のうち）

問一 「そこに、しかし、何程かの真実が含まれていることもまた否定しがたいのである」とあるが、このように筆者が言うのはなぜですか。

問二 「あるときに私は、ある西洋音楽の専門家と話していた」とあるが、この「西洋音楽の専門家」の例をひいて、筆者はどのようなことを批判しようとしているのですか。

問三 内の修飾語はそれぞれ文中のどの部分にかかっていますか。(ア)～(オ)の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 「ときには」
 - (ア) 歩くと
 - (イ) 揺れたりさえ
 - (ウ) しかねない
 - (エ) ことが
 - (オ) ある
- ② 「日本での」
 - (ア) タタミと
 - (イ) 暮す
 - (ウ) 暮し方は
 - (エ) 安全保障と
 - (オ) 思う
- ③ 「近頃」
 - (ア) 私どもが
 - (イ) いた
 - (ウ) スペインなどは
 - (エ) おえないので
 - (オ) ある
- ④ 「ヴォリュームを」
 - (ア) 若夫婦が
 - (イ) 三日ほどは
 - (ウ) 最大限に
 - (エ) あげて
 - (オ) 鳴らす

①
②
③
④

13	受験番号
中	

国 語 その六（六枚のうち）

問四 「ときどきは、なぜこうもスペイン人ばかりいるのだろう、と首を傾げるといっておかしなことになったこともある」とあるが、どうしてこのような「おかしなことになった」のですか。

問五 「一度『なぜチーノではないのだ、なぜハポネスなどであるのか？』と子供に反問されて、ぐっと閉口をしたことがあった」とあるが、それはなぜですか。

問六 「自国の歴史を徹底的によく知ること、また相手国の歴史をも、ひよっとしてその当の国の並みの人々よりもより一層に深く広く知ること」とあるが、そうすることによって、どのようなことが得られると筆者は考えていますか。説明しなさい。

問七 文章中のカタカナを漢字に直しなさい。

ヒンパ	ウタがえない	キカイ
デントウ	かかぬ	チイキ
	かぬ	えない